
Bocchi !

tyari

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bocchi!

【Nコード】

N5050BA

【作者名】

tyari

【あらすじ】

主人公の美空^{みそら} 邦孝^{くにたか}は大学に入学して、早2か月が経過している。しかし、邦孝には友達が1人もいない。要するに『ぼっち』である。邦孝は毎日悲しい生活を送り続けるが、ある日、大学生活が大きく変化する出来事が起こる。

ブローグ

ブローグ

やあ、いきなり自己紹介から始めるのもなんだが、俺の名前は美^{みそ}空邦^{らくにたか}孝小学生、中学生とクラスでは『ミクニ』というあだ名で呼ばれていた。

家族は両親と妹が一人いるが、父親は単身赴任でイギリスにいたので合うことはほとんどないのが現状だ。イギリスへ稼ぎに行くほどの父親がいるせいか、借金があるとかいう金銭面での苦労はなにもしたことがなく、今は大学に入学し2か月ほどが経過している。

なんだ、ここまで聞いていると父親以外は割とふつうな生活をしている学生じゃないか。そう思えてくる。確かに今まで悪いことは何も言っていない。さらに、大学生なんだから充実した毎日をおくっているようにも思えてくるだろう。確かに普通の大学生といったら、センター試験の苦しみから解放され、はっちゃけて友達と飲み会に行ったり、サークル活動をしたりして社会に出るまでの余興を楽しむ。それが普通だ。しかし俺は違う俺は他の人とは違う特別なそうVIPな生活をしている。なぜ？それは今俺が飯を食っている場所が問題なんだ。VIP？そう特別だ。俺は普通の学生なら絶対できない生活をしている。俺が飯を食っている場所。ここがどこかを知った瞬間、楽しい大学生活をしているといったイメージは瞬く間に吹き飛んでしまうだろう。

「トイレだ」

そう、俺はもはや学生の中では都市伝説とまでうたわれている『便所飯』をしている。清掃係のおばちゃんが毎日掃除してくれるからおばちゃん以外は気づかないかもしれないが、俺が食ったパンのくずなんかが落ちていることもあるかもしれない。もし見つけたら、オークションで100万もするビクリマンシールなみにレアだぜ。しかしなぜ便所の個室でコンビニのパン食うのか。学生なら学生ら

しく学食や近くの店でワイワイ食ったり、そこらのベンチや使われていない教室で友達と食べたりするのが普通である。また、1人で食うとしても、少なくともそこらのベンチなんかで食うべきだ。

だが俺はこの閉鎖された空間で人に隠れて飯を食っている。

「はあ・・・」

ため息が出る。なぜ俺はこんなことになってしまったのか。理由は簡単だった。

「友達ができねえ・・・」

そう俺は大学に入ってもう2か月が経過するがいまだに友達がいないのだ。世間でいう『ぼっち』である。高校生のころインターネットで『ぼっち』ネタの掲示板なんかをみてバカにして笑っていたが、まさか俺がこんなことになるなんて思ってもいなかった。

俺は容姿は別に特別悪いということはない。だが、俺は極度のあがり症と人見知り、話すともるといったような友達ができにくい要素を持っていた。それでも中学までは、ミクニとあだ名で呼んでくれるような友達はたくさんいた。しかしそれぞれ違う高校に進んだことによって会うことがなくなってしまい、年を重ねるごとにひどくなる人見知りによって高校ではミクニと呼んでくれる友達はずきず、名字で美空君と呼ばれるような表面上の付き合いだけしかできなかった。それが影響してか俺と同じ大学に進むような人なんていなかった。ということはもちろん大学ではRPGでいう『はじめから』という設定からスタートしなければならなかった。高校や中学からの友達といった引き継ぎデータを持っていないのは大学では相当不利だった。周りは最低一人は知り合いがいるといった状況で入学から2日ほどで友達グループができてしまっていた。俺はそれに入れなかった。

俺も初めは『便所飯』なんて考えられなかった。しかし学食やキヤンパスのいたところで、友達とわいわい飯を食う人たちを見ると、どんどんと精神が追いつめられていくのだ。初めは俺だつて『ぼっち』でも学食でオムライスとかラーメンを食べていた。し

かし、込み合う学食の中、たった一人で長い机の端に座っていると、周りの『リア充』どもが俺のことを悲しい目で見てくるのが分かったのだ。いや本当は俺のことなんて見てないんだろうけど、俺にはそう見えてしまう。その視線から逃れるため、俺はキャンパス内のベンチへと場所を移した。もちろん食う物も変わる。コンビニのおにぎりやパンへと。あたたかい料理がなつかしいね……。しかしここにも問題がある。大ありだ。俺が通っている大学は山の上にあるせいか春でも冬のように風が吹いて寒いのだ。だから俺以外にも友達が来るまで1人でベンチに座っている人も早々に立ち去ってしまった。雨が降っている時なんて最悪だ。室内がいいとは思ったが、たった一人で広い教室に座るわけにもいかず、結局居場所がなくなってしまった。

そんなこんなで誰からも見られず、雨も風も来ない。トイレの個室へと俺は導かれていった。9号館の地下トイレの右から3番目。そこは俺の居場所と化した。来るなよ。使用中だ。そんな汚い場所で飯を食うなんて馬鹿だ。ああ馬鹿だ。しかし仕方ない。俺は大学に入ってからランチメイト症候群という物になってしまっていた。「どうにかならないものか……」

現状を変えないことにはどうしようもない。でも、現状を変えることによって今までの生活がまったく違う物になってしまうのは怖いという考えもある。まあ便所飯なんてはつきりいっていやなんだが、明治維新がおわってもなお変わりたくない和服とまげのままの人がいたように、俺もまたその心情なのだ。

「変わるべきなんだ……。しかし……」

俺の中で新しい現実へと導く天使と、変化なんてせずこの特別な生活が続け安全に生きさせようとする悪魔とが戦っているような感じがする。今の俺はどちらかといえば天使よりだがな。俺の頭の中は渦巻いていた。俺はトイレの個室の中で頭を抱えていた……。すると、ストトツとなにかが着地したような音が響いた。2回。足音のようにも聞こえた。こういう時は息をひそめるのが先決だ。

飯食ってるのを気づかれたくないしな。しかしトイレにやってくる足音にしては近いし歩くような音ではなかった。そう着地するような。が次の瞬間俺は懐かしいフレーズを聞き、ありえないものを目にする。

「ミク二つ！あほなこと考えてこんなキモイところで飯食ってないで学食で、しかも自分に似てそんな人の隣でたべるのよ！」

「なにを・・・いつてるの・・・？そんな危ないところに行くなんて・・・そんなことより私とここで食べよ・・・？ミク二・・・」

女の声だった。しかも2人。一人目の声は、いかにも活発で品があり、だれとでも仲良くできそうな明るいこえだった。リア充くさくて俺は嫌いだ。もう一人の声は暗く、でも暖かく平和を望んでいそうで、しかし消極的で小さい声だった。今の俺の話し方にそっくりだ。がしかし。ここは男子トイレだぞ？しかも個室にどうやって入った。てかだれだお前ら。

「おいまで静かにしろばか！ばれたらまずいんだって・・・」

「心配しないでよ！ミク二つ。私たちの声と姿はあなたにしか見えないし聞こえないわ。」

「そう・・・わたしを認識できているのはあなただけ・・・」

訳が分からない・・・てかお前らはなんなんだ・・・それだけ聞かせてほしい。動揺していてなんも理解できそうにないがな。

「あらわからない？私はあなたの妄想が集まって作られた存在なのよ。すごいでしょ！そうね、あなたの中の天使といったところかなつ。あ、自己紹介が遅れたけど私の名前は尼寺あまでら 澄子すみこよ！よろしくつ

巫女服のような、でもあんなにひらひらとはしていない意味の分からない服をきた、黒髪のロングストレートの美少女は自信たっぷりに答えた。うるさい。さらに頭にかぶった巫女用の金色の冠みたいなものがキラキラしていてとてもまぶしい。ここはトイレなのに。アマテラス巫女・・・？そう聞こえたが。ちがうか尼寺とか言ったな。俺の妄想の結集だと・・・？俺はこんなやつを妄想した覚えはな

いぜ！断言する。俺は『ぼっち』だが変態ではない。

「アマテラスでも巫女でもないわよ！バカ。いいから早く学食へ行
くわよ！」

「まって・・・まだ私何も言っていない・・・」

黒っぽい上着を着た銀色の髪をしたショートヘアーそして小学生か
？ってほどの身長。いかにも暗く友達がいなさそうな、でも美少女
な女が話し出した。そういえばいたな。

「私の・・・名前は・・・ごによごによ・・・よろしく・・・悪魔で
はないわ・・・でも私もあなたに伝えることがあるの・・・」

なんだって？名前が聞き取れなかった・・・横でキーキー言ってる
巫女野郎のせいでもあるかもしれないがまったく聞こえんぞ。だま
れ。まったく、聞きたくないが、は？って言いたいぐらいだ。いつ
もは俺が言われるほうだな。白い巫女服の腕は俺の腕をグイグイ
をひっぱりやがるし、もう一人の黒いやつは、なんかごによごによ
話し続けているし。

「なんだよもう・・・」

こいつらは、俺にしか見えないし声も聞こえないらしいからほか
の人からは『ぼっち』が独り言を話しているようにしか見えないだ
ろうね。あゝいやだいやだ。俺はこの日から今までよりもさらに特
別な生活することになる。このいかにもめんどくさそうな女ども
とともにね。

1章

1章

大学に入学してからはや2か月……。大学に入学してから授業が始まるのが高校なんかよりよっぽど遅いせいか、あほな時間まで寝ていることが多くなった。おかげでギリギリに起きてしまい、朝飯を食わずに学校に行くことも多くなった。だれか起こしてくれないのか？そう聞かれてもこまる。両親は共働きで父親は単身赴任でいない。母親も朝早くに仕事に行ってしまう。もちろん朝飯を作っている暇などない。だから、朝飯は母親が休みの日以外は大抵俺の妹が作る。高校生の妹が作る朝飯。なんとリア充な響きだろうか。そう思うだろう。でもそんな甘くはないよな。あいつは自分の分しか作りやがらねえんだわ。

「くにたかあー私もう学校いくからー。友達と待ち合わせしてるからー」

いちいち友達つてところを強調すなくそ……。あいつは俺に友達がいないことを知っているらしい。俺から話したわけではないのになぜか俺の状況を理解してやがる。たぶん俺が毎日落ち込んで帰るのを見ているからかもな。あとは女の勘とか？まあそんなことはどうでもいい。俺はこの声を聴いてからいつも2度寝するのが習慣なんだ。遅刻しない程度に起きるのは結構スキルがいるんだぜ。それで、妹が家を出てから1時間後ぐらいに俺はだらだらと起きるのだ。待ち合わせは？うぜえ。俺には待ち合わせするような友達なんていねーよ。

俺はかすかに妹の朝飯のにおいのこのる台所へ向かい、においをかぎながら食パンをむさぼる。ああ今日は卵焼きのにおいがするぜ。むなしいか？しかたないね。早く起きて作らせればいい話なんだろうが、俺は妹と約束をしていた。

「くにたかにさー大学の友達ができたら私、くにたかの分の朝ごはん

んもつくつてあげるよー。だから早く友達つれてきてよ。まあ、くにたかじゃ無理かもねー。当分楽できそう。」

ひどい約束をしたもんだな……。てか、最近思ってたんだが1人分でも2人分でも手間あんま変わらなないか？それはさておき、今までの妹のセリフを聞くと、ひどい妹をもつて大変だろうと同情してくれる人もいるかもしれない。俺はそんなこと思っではいけないぜ。俺は、妹も俺が友達でなくて落ち込んでいる姿を見るのがいやで、はやく立ち直ってほしいから、やる気にさせようとこんな態度をとるようになったのだと信じているんだ。小さいころはかわいかったんだぜ。お前らが妄想する妹キヤラみたいにな。俺はそんな妹のためにも約束を果たさないとな……。

食パンしか食ってねえから腹が減るが仕方ない。俺は山の上にある学校へと自転車で向かう。立ちこぎにはもうなれたわ。でもめんどくさいことには変わらない。何か楽しいことでもあれば気分も違うんだろうが、さすがにいやになってきた。毎日毎日、黙々と一人で登校し、黙々と一人で講義を受けて黙々と一人で家に帰る日々。あほらしいよな。刑務所かよ。俺はそんなことを考えながらペダルをこぎ続けた。が、しかし今日はなんだかいつもよりペダルが重い。「くそ……。やっぱり食パンじゃだめなのか……」

違う意味であるアンパンヒーローの気分を味わっていると、目の前に何かが現れた。なんだ？俺の前には自転車のかごとその先に広がる山道しかねえはずだぞ。その瞬間、袖の白い布が俺の顔に勢いよく当たる。

「いてえな！」

誰だよ洗濯物の白い布を洗濯バサミを付け忘れ飛ばしたやつは。てかなんだよこれ、ふんどしか？ふんどしなのか？にしては太いな。俺は顔からその白い布を振り払った。普通洗濯物とかだったらこの瞬間目の前から飛んでいくはずだ。が、飛ばない。なんだよこれ……。俺はこの布に呪われたとでもいうのか……。ふんどしに……。前が見えねえんだが。あゝ完全に呪われたな俺。そう思った。する

と急に最近聞いたような声が俺の目の前から聞こえてきた。

「まだきづかないの？てか私は、ふんどしじゃないしっ。せつかくつまらない登校につきあってあげようと思ってでてきてあげたのにね。払いのけようだなんて。ミクニ！アンタはだから友達ができないのよっ。しっかりしなさい！」

なんだ・・・なんなんだ・・・朝っぱらからよくわからない女の声が聞こえる。しかもなぜか目の前から。よく見ると俺が飛んできた洗濯物の布だと思っていたものは、紺色の袴の前から伸びた、まるでチャイナドレスのスカートのようなひらひらした装飾だった。色は純白で淵は紺色で囲まれており、中心には鶴の絵が描かれている。そしてその妙な服の持ち主は俺の自転車のかごの上に立っている。よくこんなところに立てるな。ありえんぞ。てかまて、これじゃバランスが！ブレーキをかけようとした瞬間俺はその場で横転した。いてえくそ・・・。

「なによ！ミクニ、あんた自転車もこげないの？あぶないじゃないっ！」

それはこっちのセリフだ。朝っぱらから自転車で盛大にこけるとはな。というかお前は倒れる瞬間自転車から飛び降りていただろうが俺の自転車に急に乗り込んできた意味不明な野郎は、2日前トイレで『便所飯』をしているときにいきなりあらわれて、お前の妄想が現実となった存在だとかさらに意味不明なことを話、俺をあのいまいましき学食へと引っ張っていこうとした巫女服野郎。名前はなんだっけ、そうアマテラスか。

「だからアマテラスじゃないって！澄子よ尼寺澄子！あんたね、友達ができたら自転車の二人乗りだってするかもしれないのよ！いまのうちに練習しとくのよっ」

おいおい二人乗りっていうものは普通後ろの荷台にのるもんだぜ。というかお前は俺に怪我をさせるためにでてきたのかよ。

「私だつてまさか倒れるなんておもってなかったんだからねっ。怪我しちゃったんならあやまるけど」

まあいい、ゆるしてやるさ。でもな、もう意味不明な登場をするのはやめろ迷惑だ。それとなんだ2日ぶりに出てきてなんかようなか？

「ええ、私はね、あなたに伝えなければいけないことがあるのよ。とても大切なことよ。友達を作りたいのならちゃんと書くことね。」

「友達は作りたいが、前みたいなアニメや漫画みたいな話はごめんだぜ。」

「残念ながらそういう話なのよ、でもこれは本当に大切なことなんだから！」

「なんなんだよ、俺を天国へ連れてつてくれるとかか？いや神道だつたらどこだ？」

「ふざけないでよつ。全然違うわ！私はピーターパンじゃないのよ！いいから聞いて。奥廟おくひょう 小鈴こすずと一緒にいちゃだめよ！あの子とかわつてはいけないのよ。友達がほしいなら絶対にねっ！」

「だれだよそいつ・・・」

奥廟だと？なんかいかにも気の弱そうな名前だな。しかし聞いたことないな、第一俺には友達いないし彼女なんてもつとない。かわるなと言われてもかわったことなんてないはずだ。

「あの子よ！あの日トイレで私と一緒にあなたの前に現れた銀色の髪をした女の子よ！」

「銀髪？思い出せないそんなやついたか？」

俺はお前の印象が強すぎて覚えていないようだが、この女は確かに会っていると言う。いったい誰なんだ？そのとき倒れた俺の自転車の荷台から風よりも小さな声が聞こえてきた。

「痛い・・・」

俺はすぐに倒れた自転車の方向を見た。すると、小柄で黒いダツフルコートを着た銀色のショートヘアの髪を持つ暗い顔をした女が、俺の自転車の荷台にすわったまま倒れているのを発見した。なんだこいつ。かわいいなおい。

「荷台に・・・座っていたら・・・いきなり・・・自転車たおれた・

・・・」

にしては反応が遅いな。自転車が倒れてから結構時間がたってるぞというか今までペダルが重かったのは君のせいか？いつから荷台に座っていたんだ？まったく気が付かなかった。ん？銀髪・・・？「まさか・・・この子が・・・奥廟小鈴なのか？」

思い出した。俺はこの子にトイレで会っているし話している声も聞いたことがある。2日で忘れてしまうほどの存在感だったとはな。もう忘れないぞ。かわいいし。たしか名前が聞き取れなかった気がする。

「そうよ！この子があなたにとって友達を作るうえで障害となっている存在なのよ！」

信じられるか！こんなかわいい、そしてかなり俺好みの容貌をしている極限におとなしそうなこの子が悪いやつのはずがないぞ。それよりも俺はお前のほうが俺の生活をかき乱しているんじゃないかと思うんだが。アマテラス。

「ちよつと！ひどくない？せっかく危険を未然に防いであげようと思っているのに、私を悪者扱いするなんてっ。もう知らないわ！痛い目をみてからでは遅いんだから！あと、私はアマテラスじゃないわっ！」

そう言つて巫女野郎はどこかへ消えてしまった。瞬間移動ができるのかこいつらは。まあいい、俺はやらなければいけないことがある。「大丈夫か？」

俺は倒れている銀髪美少女を自転車と一緒に起こした。

「大丈夫・・・」

表情はあんまり変わらないが、うなずいているように見えた。暗い顔なのにかわいいとか反則だろ。

「それよりも・・・ミクニ・・・あなたは早く学校へ行ったほうがいい・・・」

え？早く学校につて？

「あああああっ！」

俺は自転車で倒れてからずっと山道で立ち止まったままだった。もちろん時間は経過している。講義が始まる10分前だ。

「やべえ遅刻する！いそがねえと。」

「じゃあ私は・・・先に学校へ行って待ってるね・・・ミクニ・・・」

「

そう言うと、銀髪の美少女、奥廟小鈴は風のように消えて行った。やはり瞬間移動がつかえるらしい。うらやましいな。2人が消えてから俺は軽くなったペダルをこいで学校へと急いだ。あと15分はかかるのにと10分で講義が始まる。遅刻確定だ。話を聞くだけの抗議でよかった。遅刻しても教室の後ろのほうに静かに座ればいいんだからな。1人で。そんならいは2か月も『ぼっち』ですごした俺にとっては簡単なことだ。それよりもまず喜ぶべきことは、いままでのやりとりを誰にも見られていなかったということだ。見られていたらただの変態だもんな。

2章

2章

まったく・・・俺なんかこんなアニメや漫画みたいな現象がおこるなんてな。あの日トイレでの出来事がきっかけで俺に家族以外の話相手ができた。胡散臭い巫女風の服を着た女と、俺の好みの姿のかわいい子だ。しかし、どちらも俺の妄想が現実化した存在らしく、他人から見ればただ独り言を話しているだけだという。他人にとって俺が2人と会話するということは、幻覚が見えた変態か不審者にしか見えないのだ。他の学校に通っているであろう、俺と同じ『ぼっち』の中にも時々こんな風にぶつぶつと独り言を言っている人がいるかもしれないが、そいつらにとってはただの独り言だ。俺とは多分、いや確実に違う。それだけ俺は特別な生活をしている。『ぼっち』ってだけでも一般人より特別なのに、それに加えてこの状況だ。漫画やアニメを好んでいる人にとっては最高にうらやましい現象なんだろうが、所詮は俺の妄想（自覚はない）であって、所詮俺は『ぼっち』だ。べつにこんな生活をうらやましいと思う必要はないぜ？なあ。

俺は、一人自転車事故という名のただの転倒から復帰し、もうすでに遅刻確定な講義へと急いでいた。べつに参加型の授業や体育、大嫌いなディペートとかじゃないからこんなに急ぐ必要はないが、何しろ性格が真面目なもので、授業を休んだり、大幅に遅刻するのはいやなのだ。ただでさえ『ぼっち』なのに授業に途中から参加するのはなかなかの苦痛である。俺は2か月間それには耐えてきた。一般人と俺とでは精神力が違う。ただ、シャトルランなんかを永遠と続けるような精神力はない。あればいいのにね。俺は自転車を止め、300人は軽く入れそうな大教室へと駆け足で向かった。まったく真面目だな、俺は。性格が真面目であることは生きていくため、社会に出るためには必要なことだが、この大学というところにおい

ては、真面目なやつほど損をしている感じがする。真面目に授業などに出ていないやつのほうがリア充の確率が高く、友達が多い。友達が多いので、授業に出なくても、友達を通じてテストや授業の情報を授業に出ずして手に入れることができるのだ。もちろん出席が必要な授業は友達に代わり出席表を書いてもらうこともできる。俺は『ぼっち』だから授業には出るしかない。そういう点ではリア充はすごくうらやましい。友達がほしいね。ほかにも性格が真面目だと損することはたくさんある。真面目なせいでほかの大学生の、はっちゃけた行動を見るとイライラして参加することができなくなる。『ぼっち』の人にとってはあるあるネタだろ？大学だと真面目だとろくなことがないのだ。不真面目すぎてレポートを出さず単位を落とすとまあそっちのほうがろくなことではないが。

授業開始から10分が経過したところに俺は、大教室に到着した。大学教授のつまらない話が始まっていた。できればすべらない話をしてほしいものだね。俺は、いつも通り前のほうの席に座ることにした。なにしろ真面目だから前で授業を聞きたくなるんだろうか。つまらないけどね。あとは後ろの席には、ふっとんだリア充がたむろしているので、座る気がでないというのが理由かな。本当は後ろから一人で座る俺の姿を悲しい目で見られ、笑われるのがいやだから後ろのほうに座りたいのが本心かもしれないけど。そういうことで、俺は教室の前列の端から2番目の席に座った。なぜ端ではなく2番目かというと、これは友達を作るために生み出した俺の座り方である。成功はしてないが。端に座ると、俺の隣に人が座ることができない。一つあけて座ることによって、もしかしたら誰かが俺の横に座ってくれるかもしれないからな。端に座るよりはいいと思うんだ。俺以外の『ぼっち』もやってるかもな。もちろん荷物を置くのはだめだぞ。そんなこんなで、俺はやつと席におちついた。朝っぱらから自転車を猛烈にこいだせいでつかれた……。汗臭かったらいやだな。まあ近くに誰もいないから嗅がれる心配はないが、やっぱり気になる。

授業も大分すすんだ。振り向くと、後ろのリア充どもは睡眠中だ。そういえば、奥廟さんはどこへ行ったのだろう？先へ行って待つてると行っていたが……。俺は周りを見た。意外と近くにいて思ってたがいなかった。あの子のことだから、俺が気づかない間に隣に座っていたりとかしそうだ。しかし俺の隣には誰もいなかった。俺は目を凝らしてさがした。すると、俺よりもいくらか前の席、一番前の席に、春にもかかわらず、もこもこした黒いダツフルコートをしっかりと着て、机に何も出さずに座っている銀髪の女子をみつけた。奥廟さんだ。まさか『ぼっち』の俺よりも前に人が座ることがあるとは。しかもそれが奥廟さんである。あんな席で待つていてもさすがに俺は座らないぞ……。

「さすがに一番前は俺でもきついな……」

一番前は『ぼっち』の中でも最高級にやばいやつが座る席だ。よっぽどのやつか、席がそこしか空いてない時に遅れてきたやつが座るぐらいだ。俺は都市伝説である『便所飯』をしたことがあるが、がら空きの教室での授業中、一番前の席にすわったことはない。それほど一番前に座るということはとんでもないことなのだ。それをあの子は簡単にやってのけている。あんなところに座つていたら確実に友達はできないと俺は思う。そんな席で俺を待たれてもこまる。だから、俺は奥廟さんを見つけても、席を移動することはなかった。奥廟さんも俺のほうを振り向くことはなく、もくもくと前を見続けた。教授よ見えていないだろうが、一番前で熱心に授業を聞いている、しかもかわいい子が目の前にいるんだぞ。鼻くそなんてほじるな。

長くてめんどくさい90分が経過し授業は終わった。授業が終わるとリア充どもは、ほかに何人もいる友達と合流して去っていく。俺はそんなやつらをしり目に筆箱やノートの片付けを始めた。すると、知らぬ間に奥廟さんが隣に立っていた。

「私の横……空いてたよ……座らなかったの……？気づかなかったの……？」

相変わらず小さい声だ。騒がしいリア充どもが去っていなかったら聞き取れなかったぞ。

「途中から気づいてはいたけど、さすがに一番前に移動して座る勇氣はなかったよ・・・ごめんな」

「そう・・・まあ今のあなたでは無理かもしれないわね・・・」

「今の俺だと・・・？」

「次は体育・・・体育館で待つてる・・・」

その瞬間、奥廟さんは跡形もなく消えていた。今の俺には無理ってなんなんだ？今でも後でも俺は、一番前になんか座ることなんてできない。そう思う。一番前は完全に友達を作るのをやめたやつが座る席だ。俺はかわいい奥廟さんの隣に座りたい、というより俺の横に来て座ってくれればいいんだ。1つ空いてるだろ？隣。なのにあの子は1番前に座った。まるで俺に横に来てほしいみたいに。

「そうか・・・次は体育か」

俺は奥廟さんの行動を不思議に思いながら、体育館へと向かった。バスケットだったな。ランダムで先生が決めたチームで対戦する。ゲーム前は時間が来るまで1人でシュート練習がいつもの授業だ。

「待つてるっていつても、俺と一緒にバスケットはできないよな」

奥廟さんは俺にとつては、触れることも話すこともできる存在だが、他人からは見えないし触れることもできない。だから体育館で待つていられようが、俺の姿を見てもらうぐらいしかできない。まあそれでも女の子に見られているというのもなかなかうれしいかもしれないな。ただ、変な目や悲しい目で見られる以外ならいい。俺のことをそういう目以外で見てくれる人がいてくれたらどんなにうれしいことか。体育も友達がいれば楽しいだろうな。たとえ面倒なシャトルランでも。俺は友達のいない体育館のフロアへと足をはこんだ。俺がフロアに入ると体育館の中ではリア充たちが勝手に倉庫から出てきたボールで遊んでいた。髪型と姿ばかりかつこいいが、バスケットは見かけ倒しの初心者ばかりだ。なかには、あほみたいに上手い超絶リア充もいるが。この学校の体育は1年生の時だけあり、前

期、後期に何の球技をするのかを選択するもので、俺は選択肢の1つである、前期にバスケット、後期にサッカーという取り合わせをえらんだ。なぜリア充が集合しやすいバスケットを選んだかというと、俺は中学の頃バスケットをしていて、初心者よりは、何倍も上手い自信があったからだ。ここで活躍できれば友達ができるかもしれない。ほかの選択肢ではバドミントンや卓球、ソフトボールなんかもあったが、前期のだれもが友達がいなかった時期に個人スポーツを選ぶのは自殺行為だと思ったからというのがもう1つの理由だ。俺はそうやってチームスポーツで得意なバスケットを選んだわけだが、

やっぱり友達ではできなかった。俺はゼロからのスタートだったが、ほかの連中は高校が同じだとか家が近いだとかで初めから友達集団の状態で談合して科目を決めているやつばかりで、すでに友達の輪ができあがってしまっていたのだ。これは俺にとって計算外だった。もちろん、俺はそんな初めから決まった輪になんて入るわけがない。俺は体育でも『ぼっち』になることになった。プレイがほかの人よりうまいということもあって、チームメイトは話しかけてくれることもあるが、それは表面上の付き合いだけで、授業が終わると、俺になんて話しかけてくれない。ここで友達がいれば次の授業が始まるまでの休み時間を一緒にすごすことができるんだがな……。そんなことを考えていると先生がやってきて授業が始まった。が、次の瞬間俺は『ぼっち』としての最大のピンチであり恐怖が襲うことになる。いつもはこんなことなんてないはずなのに。

「おい。お前ら、今日は一人でシュート練習するんじゃないで、2人組でパスの練習だ！二人組を作れ」

きたよ。『二人組』。これが『ぼっち』にとって1番つらい言葉なんだ。高校でも中学でもたとえ小学であつたとしても、『ぼっち』にとっては、体育教師のこの言葉は禁句だった。

「ちょ……まで……」

俺は焦っていた。いつも通りに一人でシュート練習をするのであれば、適当に切り抜けることができるのに。まるでバチが当たったよ

うな感じがした。まさか、アマテラスの野郎がなんかしたのか？くそが。まあ何とかなるはずだ。この体育の授業は偶数だ。余ることはないはずだ。そう思い俺は周りを見た。余ってるやついるよな、俺とくもうぜ。が、しかし俺以外のやつはみんな2人組を作り終わっていた。

「うそだろ・・・」

余るはずがないんだ・・・俺はそう思った。すると、

「あゝ鈴木は休みか！おい美空、お前あまったか。ならしかたない先生とくむか。」

ふざけるな。なぜ休んだ！しかもこんな大事な時に。偶然にしてはできすぎているぞ。

「あ・・・はい・・・」

俺は仕方なく先生と組むことになった。周りのやつらはほくそ笑んでいた。こういうシチュエーションは友達がいるやつにとっては笑えるもんな。俺は泣きたい気分のまま、髭が濃くてむさい先生とパス練習をした。なんだこれ。そのまま乗らない気分のまま、5対5のゲームも楽しくないまますぐに終わってしまい、体育の授業は終わった。

「そういえば、奥廟さんは・・・」

体育館で待っているといったが、奥廟さんは来ていなかった。そうか、いたけど帰ったのかな。俺が2人組で余って先生と組むような姿なんて誰も見たくない。ましては俺の味方でありそんな奥廟さんが。すると、風の音とともに俺のよく知る人物が姿を現し、俺に落胆したような声で話しかけてきた。

「だからいったでしょ、奥廟さんと一緒にいるとろくなことがないって。」

巫女服野郎アマテラスだ。何しに来た。俺がこんな目にあつたのは偶然じゃないはずだ。

「お前がなんかしたんだろ。痛い目に合うって言ったのはこれか！」

「失礼な！私はそんな悪魔みたいなことはしないわよっ！本当はあなたに友達ができていたかもしれないのに、あなたが登校中に奥廟さんを選んだことよって、それができなくなっただから。」

「どういうことだ？本当は友達ができていた？意味が分からんぞ。」

「私が、ちよつと細工してね、体育で二人組の授業をさせることによつて、一緒に組んだ人とあなたを友達にしようとしたのよ。」

「お前そんなことができるのか、さすがは巫女だな……。神と交信でもしたのか。」

「私は巫女ではないって言ったでしょ、でもあなたを友達ができる状況へと導くことができるの。あの時私の言うことを聞いていれば、友達ができる確率はかなりたかかったわっ。そうね60%ぐらいかしら。」

「60%って高いのか低いのかはよくわからん。ゲームだとよく外れるが、少なくとも半分よりは上だな。俺はそんな確率で友達ができていたのか……。」

「そついうことよ！なのにあなたは、あの子とともにいた。あの子は偶数で余らないはずのあなたを余らせ、友達ができないようにするために、鈴木君を休ませたのよ。」

「そんなばかな……。あんなかわいい子がそんなことをするわけがないだろ！そこは偶然だろ。」

「さつきは偶然を私のせいにしたじゃない！」

「それは……。」

「いいからあなたはあの子とかかわつてはいけないの！友達がほしければいい。昼ごはんの時間ね学食で待ってるわ！ちゃんと来なさいよ！トイレになんか逃げずにねっ」

そついうと、白い布の服を翻し、尼寺澄子はどこかへ消えて行つた。その瞬間移動俺に教える。

「どういうことだ……。」

めんどくさくて、うるさくて、うざい尼寺が俺に友達を作らせようとし、ちっちゃくて、かわいくて、好みな奥廟さんが俺に友達がで

きるのを邪魔しているとは。俺はあのトイレでの考え事の時のように頭がうずまいた。まるで天使と悪魔が頭の中で戦っているように。俺はしばらく体育館の更衣室から動けなかった。

3章

3章

体育の後のこと。俺はしばらく更衣室から動くことができなかった。『ぼっち』にとつてはかなりつらい『二人組』という出来事があつたからということもあるが、俺が何よりもシヨックを受けたのは、尼寺が、現実的ではないとんでもない話を俺にしてきたということだ。あの日トイレの個室で俺の前に現れた二人。あいつらは俺の運命を変えることができるのか？そんなアニメや漫画みたいな話があつてたまるか！まったく信じられんだ。特にあの可愛くておとなしくて、どこことなく不思議な奥廟さんが、俺の友達作りを邪魔しているということが一番嘘くさい。あの子は尼寺なんかより、よっぽど俺に友好的に接してくれる。俺を隣の席によんでくれたり、こんな俺のことを待っていてくれたりもしてくれる。それと比べて尼寺はどうだ？自分の言うことを聞かないと不幸になるだとか、もこもこした可愛い奥廟さんをまるで悪霊のように非難している。それも、非現実的な理由付きで。まあ、俺の妄想の集合とかいうやつらが現れたこと自体非現実的だが、そこは俺があまりにも『ぼっち』で寂しい生活をしているせいで頭がおかしくなり、あほな幻覚を見ているということにすればなんら問題はない。それだけ『ぼっち』はつらいんだぜ。しかし、何度も言うが、俺は尼寺の話は信じることができない。あんな巫女みたいな服装でうさんくさい野郎の言うことを聞いてその通りに行動していれば友達ができ、『ぼっち』を脱出することができるのか？そんなうまい話があるわけない。現実をなめすぎだ。たしかに、やつは俺がより人とかかわるような方向へ行くように仕向けているかもしれないが、結局は俺自身の能力や、判断力、運によって、俺の運命は変わるはずだ。さらに思うのは、あの奥廟さんが、鈴木とかいうやつを休ませ、俺を『二人組』から余らせたという尼寺の発言についてである。あいつはもしかしたら、

自分がしたことを奥廟さんのせいに行っている可能性がある。なにしろ、あのような出来事が起こったのは、尼寺が俺の行く運命を変えるために体育教師に『二人組』を作る必要がある授業をさせたことが第一の原因なのだ。実際そんなことができるということが信じられないが、もしそんなことができるのなら、元の原因は尼寺ということになる。あいつが『二人組』の授業をさせなければ、余ることもなかった。鈴木が休んだのは偶然で、俺が余るという運命はもとからあり、俺を余らせたことを言い逃れるために、うまいことを言い、俺が余るといった運命だけを奥廟さんが変えたということにしたのかもしれない。こつちのほうで現実っぽく考えられる。尼寺も奥廟さんも、どっちも俺の妄想らしいが、奥廟さんの外見は俺が思う理想の彼女像に近い。内面は相当暗いから全然違うが。逆に尼寺の姿は、俺が一番嫌いなリア充で、できればかわりたくない存在に近い。服装こそ意味が分からんが、こつちは性格も話し方もなにもかも嫌いだ。俺にとつて、もしどつちかが悪役だと思つたら、尼寺のほうが悪役であつてほしいし、そつちのほうが都合がいいのだ。

「しかしそうとも言い切れないよな・・・」

尼寺が俺を困らせるために、こんなことをわざわざする必要があつただろうか。俺はこんなことを、わざわざされなくても体育で『ぼつち』である。いちいち細工なんかしなくても、初めから余つていようなものだ。いちいちとんでもない能力を使う必要なんてないのである。リア充みたいなやつが俺にそこまでして嫌がらせするか？ そんなことをしてくるやつは、小学校のいじめっ子レベルだ。大学以上の世界では、『ぼつち』のやつをさらに苦しめるのではなく、空気としてかわからないことが常識である。いちいち『ぼつち』にかかわるなんて労力のいることはしない。かわらず、影で笑うのがやつらのやり方だからな。第一かわられると『ぼつち』ではなく『いじめられっ子』になってしまうからな。あくまで俺は『ぼつち』だ。いじめられたことは幸運なことに1回もないぜ。まあ精神

的には『ぼっち』もいじめと同じぐらいやばいが。

「あーもうわけわかんねえよ・・・」

これ以上考えるのはやめた。直接、尼寺や奥廟さんに聞くのが一番である。どっちも信用ならないが、やつらと話すことによって、何か分かることもあるかもしれないから。1人で考えてるよりはましだ。

「学食か・・・あんなとこ行きたくねえな・・・」

尼寺は学食で待っていると言っていた。待ってるといっても学食のどこにいるんだよ。リア充が固まって座つてるところにでもいやがったら、俺は則退出するぜ。奥廟さんは、体育館で待っていると云ったきりどこかへいなくなってしまったから、次に会えるのはいつになるんだろうか。俺の妄想のくせに都合のいいタイミングで出てきてくれないというのは不便だな。奥廟さんは見当たらないから、とりあえず尼寺がまつ学食にでも行ってみるか。まったく気が進まないし、行きたくないし、会いたくないが、真実を知るためには仕方がない。これ以上勝手なことをされたら困るからな。事前に防ぐことも大切だ。

「とりあえず行くか・・・」

俺はしぶしぶ学食へと向かった。学生のたまり場である学食へこんな重い気分で行くやつが俺のほかにいるだろうか？いたとしたら俺と同じ『ぼっち』だな。うまいものが食えるということ以外では『ぼっち』にとって学食はいいところではないのだ。俺はリア充たちが歩く後ろを一人でゆつくりと歩いていった。

学食へと到着するとすぐ、俺は気分が悪くなった。見渡せば周りにはリア充のグループばかり。ちらほらと一人で座っている俺にた連中もいるようだが、あいつらはまだランチメイト症候群にはなっていないようだ。それが全く気にしないような賢者かだな。できれば俺はこんなところにいたくなかった。とつと用をすませよう。俺は尼寺を探した。

「リア充グループの横とかにいやがったら俺は帰るぞ」

そんなことを呟きながら俺は尼寺を探した。すると誰も座っていない机の端に、目立ちまくる白い布地に紺色のふいちどりの袖。光り輝く黒い長髪。そしてそれよりも輝く古墳時代にありそうな冠をかぶった女を見つけた。実際こんなやつが学校にいたらただの変態だと言える姿。尼寺だ。意外だった。あいつはもつと人が多い席に座っていて俺を待っているのかと思っていたからだ。俺にとつては都合のいい席だ。リア充どころか、だれもいないからな周りに。人に見られることも少ない席だ。ここまで来たのだから久しぶりに学食の料理を食べるのも悪くない。あの席なら今の俺でも何とかなる。俺は、大学に入っただばかりのころよく食べて、結構気に入っていたオムライスを注文し、尼寺が座っている席の前の席へと向かった。俺は尼寺の席の前にお盆を置いた。するとそれまで黙って座っていた尼寺が口をひらいた。

「おー逃げずに来たわねっ。えらい！私だってね意地悪ではないわいきなり人がたくさんいる机になんて私が座っていたらあなたは途中で帰っちゃうもんね。ミクニ。だからリハビリもかねて、学食の雰囲気慣れるために、誰も座ってなくて目立たない席を選んだのよ。」

こいつ、そんなことまで考えていたのか。

「これからは『便所飯』だなんてあほで汚いことしちゃだめよ。あなたが嫌う学食にだって、こうやって普通にご飯を食べれるところもあるんだからっ。ここで食べることに慣れることができる、あなたはあの日『便所飯』をしていたころよりもレベルアップすることができるよう！より明るい方向にねっ。」

ますますよく分からなくなった。こいつは本当に俺に友達ができるように考えた行動をしているのだろうか。となると、俺を鈴木と組ませようとしたのもこいつが考えてやったことなのか？聞いてみる必要があるな。俺はオムライスを食いながら、質問を投げかけた。うまいなオムライス。

「どこまでがお前のやったことなんだ？俺はさっぱり理解できない。

体育の時お前は俺の運命を変えたんだよな？」

「そうよ。さつきも言ったけど私は、あなたと鈴木君を会話とさせるため、あなたと鈴木君を仲良くさせるために、体育教師に『二人組』の授業をさせたのよ。あなたは、人見知りでもり症。普通だったら会話なんて続かないわ。でも鈴木君はどんな人でも平等に接することができる心の広い人よ。あの人とならきつと会話が続くと思ったのよ。私はあなたを故意に余らせたりなんかはしないわ！」

「誰とでも平等に接するって、それを言ったら高校の時の表面上の付き合いと同じだろ。第一俺は、5対5のチームメイトとはそんな風に付き合っているぜ」

「ミクニ。あなたは大学に入ってから、二人っきりで授業の業務的な話以外のことをはなしたことあるの？趣味や日常の会話を。ないわよね？鈴木君はそういう話も誰へだたりなく話すことができる立派な人よ。目指すべき存在だわっ」

尼寺の言葉が俺に突き刺さった。たしかに俺は業務的なこと以外の内容を大学で人と話したことがない。まさかこいつは俺に、人ちゃんとした話をする機会を与えてくれようとしてくれたのではないだろうか。

「私の言っていることを全部信じて、全部実行する必要なんてないわ。だってあなたの運命はあなたが決めることだからねっ。ミクニ。私はただ、あなたに友達ができるように少し手を貸しているだけなのよ。」

俺の中での尼寺のイメージが変わった。こいつは俺のことをこまめに考えて行動しているんだ。外見、話し方、なにかも嫌いだったこいつは、だれよりも俺の行動を理解し、俺のこと理解しているんだ。

「すまんかった……。俺はお前のことを悪人でとんでもないやつだと思っていた。ゆるしてくれ」

「わかったらいいのよ。ね？私と一緒にいたら友達ができそうな

きがするでしょ？あ、そうそう、ミクニあなたに見てほしいものがあるのよ。オムライス食べ終わったらついてきて！」

なんだ見せたいものって。俺は急いでオムライスを口に詰め込んだ。気になるからな。なんにしる俺にとってプラスになるものだろう。今の俺にはそう思えていた。なぜかこいつといると考えもポジティブになる気がした。俺は白い巫女服で帯紐が赤い後姿を追いかけた。走るなよ……。俺はいま飯食ったばかりだぞ。俺を腹痛にするか。するとその白くてゆったりとした服を着た女性は大学の情報掲示板の前で立ち止まった。そして俺に明るく輝く目を見せながら言った。

「これよ！保育ボランティア！あなたは私とこれに参加するのいいと思うのっ。これならほかの参加者とも関わることもできるし、それが無理だとしても子供と関わることによって、ちょっとはあなたの人見知りやどもりもなくなるんじゃない？」

なにに？保育ボランティア。参加人数20人、昼飯込。みつば保育園で子供たちと遊んでみませんか。なるほど、確かにこれならいやでも人と話すことになるな。子供相手に黙ってられるわけがないし。尼寺のやつよく考えたものだ。

「もちろん行くわよね？いや行きましょう！私も早くあなたには明るくなってほしいわっ。」

「ああ。考えとくよ。お前にしちやいいアイデアじゃないか。」
「ふふーん」

得意げな顔をしてやがる。これがドヤ顔というやつか。意外とかわいいところもあるんだな。見直したぜ。日にちは夏休みのうちの3日間。夏に予定ができるなんて思ってもいなかった。やはり俺の生活は少しずつかわいつつあるらしいな。

「じゃあ私はその日の前日ぐらいにまた現れるとしようかねっ。それまではちゃんと私の言うとおり『便所飯』なんてしちやだめよっ？」

「ああ。わかったよ。学食も席を選べば大丈夫だったしな。」

「がんばってねっ。私はしばらくでないけどしっかりやるのよっ！
ただ、奥廟さんには気をつけてね！」

そういうと尼寺は、いつも通り風のように消えて行った。あ、瞬間移動について聞くの忘れてたわ。

「やれやれ。今日はいろいろあったな・・・」

確かに今日は内容が濃すぎた。自転車で倒れ、体育で余り、学食で飯を食い、保育ボランティアに興味をもったのだからな。まさか『ぼっち』の俺が保育ボランティアみたいなリア充が行きそうな行事に参加しようと思う日がくるとは。俺はこのまま変わっていくことができるんじゃないだろうか。そう思っていた。すると、風の音とともに見覚えがある姿があらわれた。赤い瞳で、銀色のショートヘアをわずかに風になびかせ、季節はこれから夏へと向かうというのに、もかもこした漆黒のダッフルコートを身にまとった小柄な少女。奥廟小鈴が数時間ぶりに姿を現したのだ。

「ミクニ・・・あなた・・・なんでいつものトイレにこなかったの・・・？」

トイレ？ああ。俺が毎日のように昼休みにこもっていた3番目のトイレか。俺が2人に出会った場所だ。

「わたし・・・あそこで・・・あなたを待ってたのよ・・・あなたはきつと来る。そう思っていたのに・・・」

男子トイレで人を待つ女子。今思えば訳が分からないな。俺は今日、学食で飯を食ったんだぜ、1か月とちょっとぶりぐらいにな。

「！！・・・学食で食べるだなんて・・・なんて危険な・・・。そんなことをしたらあなたの今までの平和な生活が崩れてしまう・・・。」

そんなことはなかったぞ。学食だってちゃんと場所を選べば意外と快適に食えることもある。そうほかの、おひとり様と同じようにな。俺は多分もう便所で飯を食うことはほばないと思うぜ。さらば3番目のマイルームよ。

「快適だなんて・・・ミクニ・・・あなたは気づかなかったの・・・」

・？あなたが学食に入り食べ物を注文しているとき、周りのリア充たちはあなたのことを見ていたのよ・・・指をさしながら・・・」

「なんだと・・・」

「笑い声が聞こえなかったの・・・？きつとあなたのことを笑っていたのよ・・・」

「やめろ・・・！」

俺は急激に気分が悪くなっていった。まさか知らぬ間に俺はそんな目に合っていたなんて・・・。今までの明るい気分が一気に冷めていくのが分かった。そう・・・俺はしょせん『ぼっち』。リア充のネタになる存在なんだ。

「保育ボランティアだなんて・・・そんなものに行ったら・・・あなたはきつと苦しい思いをするわ・・・。そんなものはいかないで・・・私と家で・・・一緒にすごしましょう・・・？せつかくの夏休みよ・・・」

「あ・・・ああ・・・」

俺の精神状態は、あの日トイレで二人に会う前までの状態へと戻っていた。

「だめだ・・・今日はもう帰ったほうがいい・・・とても3限目に出れる気分じゃねえ・・・」

「そうよ・・・私と帰りましょう・・・いつも通り家にね・・・」

俺は従うしかなかった。何も考えられなかった。ただ俺はいつも通り、自転車小屋へと向かっていた。何も考えずに帰っていたあのころと同じように。

4章

4章

下り坂だった。帰りの山道も、今の俺の気分も。本当は今日のうちに、例のイベント、そう、保育ボランティアの参加申し込みをしようと思っていたのだ。だけど俺は、いつも通り何もせずただ家へと向かっている。本当はまだ授業も残っているが、受ける気にもならない。あんなことを聞かされたら、それは落ち込むだろ。『ぼっち』なら当然な。奥廟さんが俺に伝えてくれなかったら、俺はこれからも学食で笑われる生活を送っていたかもしれない。尼寺・・・悪いな、俺にはやっぱり学食なんて無理だったみたいだ。尼寺が言うことのすべてを聞くつもりはなかったが、尼寺と飯を食ってから俺は次の日から学食で飯を食うことに対して、少し乗り気になっていた。あいつと一緒にいるとなんでもできそうな気分になる。友達をつくることもな。しかしそれはただの気分だったのだ。俺だって生活を変えたい。このまま『ぼっち』で大学生活を終わらせたくないし、続けていきたいくもない。あいつといれば変わることができると思う。だけど、俺の心の隅にある生活環境が変化してしまうことへの恐怖が、変化への気持ちを抑えてしまうのだ。生物は生活環境が変わると、それに適応できなかった場合、死をむかえることになる。死ぬとまではいかないだろうが、俺だって、適応できなかった時のことを考えると、怖くて仕方がないのだ。へたれだと笑うが、いいさ。その恐怖心が俺の行動を制限しているのは言うまでもない。しかし、俺はその恐怖心によって、急激な生活環境の変化から守られているとも考えられる。その恐怖心は、俺にとって不利になるかもしれない行動をストップしてくれる。尼寺は俺に、奥廟さんは、俺の行動を制限している存在だから近寄るなど言っていた。しかし、今日の出来事から考えると、奥廟さんは俺がリア充たちに笑われていたという現実を俺に伝え、俺が知らぬ間に傷つき続けるというこ

とを、未然に防ぐように言ってくれたようにも感じる。奥廟さんは俺に不利な状況を、または気づかなかったことも、俺に伝えてくれた。俺を守るために。これは俺の勝手な考えだが、奥廟さんは俺の妄想、心の中の存在であるとともに、俺の中の変化に対する恐怖心の塊なのではないかと。そうなれば、尼寺が言う、『行動を制限する存在』というのにも納得がいく。そうなると奥廟さんは別に悪い存在ではなく、むしろいい存在のように思える。俺は奥廟さんといることによって、俺はリア充たちから精神的に傷つけられることがなくなるのか。奥廟さんは俺に保育ボランティアには行かないほうが良いと言った。もしかしたら、俺はそのイベントに行くことによって、なにか俺にとって不利なことがおこるのだろうか。それを未然に防ぐために奥廟さんは、俺に忠告したのだろうか。そうだとしたら、奥廟さん。俺はあなたのことが好きになっちゃうかもしれないいな。しかし、一つ考えられることは、そんな危険が待っているとして、奥廟さんにそれが予知できて、尼寺にできないとは考えにくいということだ。もし、俺にとって不利なことが起こるということを知っているなら、尼寺は俺に保育ボランティアに行こうだなんて誘ったりはしないはずだ。尼寺がわざとにその不幸へと俺を誘い込もうとするなどもう考えられない。あいつは悪人じゃない。俺はあいつを見直したんだ。あいつがいれば、俺にとって不幸なことが起こるといった運命もなくなってしまうように感じるのだ。

「くそ・・・どっちを信じればいいんだ・・・どっちを取ればいいんだ・・・」

今の俺では判断することができない。保育ボランティアというイベントが、俺にとって得なのか損なのか。実際そんな損得感情で行動なんてするものではないが、人生には得なことばかりが起こる行事やイベントなんてないし、その逆もないのだ。どっちが正しいとは断定できない。どっちも起こるかもしれないのが人生だからだ。どちらかの発言が嘘という可能性もあるが、もうそんないちいち疑ってられない。あきただろ？疑ってばかりでさ。俺はこんなことを考

えながら自転車を走らせ、考えがまとまるころには家についていた。いつもより早く着いた。それは奥廟さんが荷台にすわっていたからだろう。二人乗りでの下り坂はスピードが出るからな。もし奥廟さんがほかの人にも見えるのならば俺の姿はリア充に見えたかもな落ち込んだり考え込んだりしている顔以外は。俺は、自転車を止めると、家についてほっとしているのか、微笑んでいる奥廟さんに自分がこれからどうするのかを話した。どもりながら。

「お、お、俺さ、い、行こうと思うんだ保育ボランティアに。お、奥廟さんが言うように、俺にとって何かよくないことが、お、起くるかもしれない。でも、いいことだってあるかもしれない。す、すべてが無駄だということは無いと思うんだ。だから、俺行くことにするよ。」

よし言えた。だいぶもったが、肝心なところはどもってないから大丈夫か。すると今まで人形のように微笑んでいた奥廟さんが急に暗いいつもの表情に戻り、残念そうに口を開いた。

「そう・・・残念ね・・・家であなたと過ごせると思っていたのに・・・ミクニ・・・でも・・・きつとよくないことが起こるはずよ・・・きつとあなたは傷つく・・・今からでも遅くないわ・・・考え直して・・・ね・・・」

「いや、俺はもう決めたんだ。何かしないことには少しも変化しない。急激な変化は怖いが、少しずつ、確実に変わっていけば、俺みたいなの『ぼっち』にだっていいことがあるかもしれないからな」
「そう・・・じゃあしかたないわ・・・あなたと一緒に家で過ごしたかったけど・・・残念ね・・・私はその間は出てこないことにするわ・・・あなたを守れなくて・・・本当に残念・・・」

そついうと家に入る前に奥廟さんは、どこかへ行ってしまった。家に妹や母親以外の女性を入れたことがない俺にとってはちよつと惜しかったかもしれない。家の中で話せばよかったな。家に入れる女性第1号がかわいい奥廟さんなら、俺は万々歳だったのに。たとえば妄想でも触れられるんだから1人として数えてもいいよな？そつう

えば、また瞬間移動について聞くのを忘れてた。まあもういいや諦めよう。俺は玄関の戸をあけて中に入った。すると、俺を出迎えたやつが目を丸くして立っていた。俺の妹だ。

「くにたか、あんた誰と話してたの？ま、まさか友達？いやだあ、くにたかの朝ごはん作るの。あれ？でも話相手の声が聞こえなかったよね？まさか独り言・・・？おかあさん、くにたかついに老化が始まったみたいだよ」

しまった・・・聞かれていたか。老化だなんて言つなよ悲しくなる。俺ら、歳そんなにかわらんだろ、妹よ、俺がおじさんなら、お前はおばさんだ。今度からは気を付けないと。全部独り言をしているように見えるなんてな。そういえば、母さんも妹も帰っていたのか。早くないか？まだ昼過ぎだぞ。朝早くに仕事に行く母親ならまだしも、妹まで。今日はテスト週間かなんかなのかな。ちようどいい、とりあえず報告しないといけないな。

「母さん、俺、夏休みのこの3日間、保育ボランティアに行くことにしたよ。昼飯、夜飯はあっちで食うからよろしく」

「あら、めずらしいわね。あなたが夏休みに予定ができるなんて。いいこといいこと。そういえば大学で友達できた？高校では友達らしい友達がいなかったように思えるけど」

ぐっ・・・これはまた堪えるな・・・。母親の『友達できた？』は『ぼっち』にとつてはつらい一言だ。

「あ・・・ああ、大丈夫元気にやってるから心配しなくていいよ」

「あらそう？なら大丈夫ね。無理しちゃだめよ？がんばってきてね」

「くにたかあ、保育ボランティア行くとか、ロリコンなの？こわっうつせばか。誰がロリコンだ。確かに小さい子はかわいいが、俺はロリコンなんかではないぞ！断じて。目的はそんなやましいことではなく、友達をつくるためだからな。園児と友達に？ちげえよ参加者とだよ。あとは、コミュニケーション能力の向上が目的だな。

俺には行動を起こすことが必要であるとともに、真実を確かめる必要がある。最終的な運命は、俺の行動にかかっているのは言うまで

もないが、保育ボランティアという活動が、俺にとって何かプラスになるのか、それとも俺は何もできず精神を傷つけられ、参加したことを後悔することになってしまふかによって、俺はこれからどっちに合わせていくべきかということを決めなければならぬ。尼寺と一緒に、変化へと進んでいくか、奥廟さんと一緒に現状を維持し、激しい変化から逃れるかだ。普通の大学生だったら、間違いなく尼寺を選ぶだろう。大学生はそれだけ積極的じゃないと、今の俺のようになってしまう。しかし、1度俺のような環境で生活するようになってしまった人間には、難しい選択となるのだ。だが、俺はこれから何かが起こる保育ボランティアまでの数日間、極端なことはいないようにしようと思った。尼寺が言うように学食で飯を食うというのも、すまないが控える。せつかく考えてくれたのはうれしいが、まだ俺はそこまでレベルアップできていない。奥廟さんが言うように、最近の俺の状態のまま『便所飯』をするのもやめる。『便所飯』をしていたら本当に何一つ変わらないからな。俺は少しずつ変化していききたいのだ。奥廟さんに、学食での状態を伝えられたときは、ふたたび例のトイレに籠ろうと思った。しかし、俺はあの時、尼寺が俺にしてくれたこと、そしてあいつのかわいいドヤ顔を思い出したのだ。あいつは俺のために考えて、俺が少しでも成長できるようにしてくれた。俺はそれを無駄になどしたくないと感じ、我に返った。俺はもう『便所飯』をする気はない。だから俺は、明日からは『便所飯』から1つレベルを上げ、室内のベンチでの一人飯をすることにした。ベンチなら、完全に閉鎖されているわけではなく、逆に学食の時よりは、リア充たちに見られることも少なくなる。尼寺に言われたことを完全に無駄にするのではなく、少しでも自分で生活を変えていくために努力しようと思い、これを決断した。やっぱ尼寺が来てから俺は少しずつ変わることができている。精神的に、本当に感謝してるぜ。

「さて、夏休みまであと数日。とっとと申込みをすませるか」

家にまで戻ってきてしまったが、定員が20名ということで早く

申込みをしないと間に合わないかもしれない。間に合わなかったらもとももない。1度は家まで戻ってきてしまったが、今からでも学生課に行けば間に合う。またあの坂を上るのは癪だが。ああ、授業にはもう間に合わないことは分かっているが、俺の目的は授業なんかではない。なんか俺少し不真面目になったな。いいことなのか悪いことなのか。まあとにかく、俺は再び大学へ向かうことにした。車庫に入れたばかりのまだ、サドルが暖かい自転車を取り出し、出かけようとした時だった。

「くにたかあーどっかいくの？もしかして、友達のところ？うわーやだーくにたかのご飯つくるの。」

「うるさい。違う。大学に行くんだよ、忘れ物をしたんだ。俺に本当に友達ができたらちゃんと約束もってくれよ」

いちいち突っかかってくるとは。しかも毎回同じネタだ。まあ無視されるよりはいい。それだけ俺の現状が気になるのだろう。大丈夫だ、俺はまだあきらめちゃいない。いつかはお前のうまそうな料理を食べてやるさ。俺は妹との会話を切り上げ、自転車にまたがり、大学へと向かった。

きつい山道を乗り越え、俺は大学へと舞い戻った。学生課はすぐそこだ。俺は早歩きで学生課へと向かった。こんなに積極的に行動するのは久しぶりだな。俺は学生課へとたどり着き、担当の人に勇気を振り絞って話しかけた。

「あ、あの、保育ボランティアの参加申し込みに来ました。」

すると、その担当の人が参加の申込み用紙をくれるよりも先に、俺に話しかけてくる人がいた。

「あら？君もボランティアに申し込むの？だったらよろしくね。私も今申し込んだところよ。」

俺に声をかけてきた人。それは尼寺でも奥廟さんでもなかった。こげ茶色の髪のポニーテールで、眼鏡をかけている。ポニーテールなんて大学では珍しいな、初めて見た。しかし、かなり大人っぽい。驚いた、こんなところで人に話しかけられるなんて。

「あ・・あ、そそそそうです。み、美空邦孝つていいです」
相変わらず、どもつちまう。しかたないさ、初対面でさらに女性だぞ。

「耳空君？珍しい苗字ね。私は2年生の大林^{おおばやし} 蓮^{れん}よ。君は見た感じ1年生ね。まだ初々しさが残ってるみたい。また当日会いましょ」
そう言つと、大林さんは部屋を出て行つた。大人っぽい人だと思つたら先輩だったのか。きれいだったなあ・・。しかし名前を間違つて認識されちまつた。俺は耳空じゃなくて美空だ。美空ですと言いなおす前に帰つてしまつたからもはや仕方ない。また会つたときにも耳空じゃないと言つておこつ。にしてもびつくりした。初対面で、さらに俺みたいなやつに話しかけてくるとは、大林さんは、よほどの話し上手らしい。きっと友達が多いリア充なんだろうな。話しかける能力はぜひ見習いたいところだ。大林さんが部屋を出て行つてしばらくしてから、俺の申込みは終了した。これで行くしかなかったな。やったぜ俺。思ったが、今日のこの時間に申し込みに来なかつたら俺は大林さんと話すこともなかつたわけか。あんな話し上手の人に出会えるなんてな。来てよかったぜ本当に。俺の気分は晴れやかだった。今日は本当に気分がよく変わる日だな。俺は、そんなことを思いながら、学生課から退室し、自転車小屋へと向かつていた。すると急に風が強くなつたかと思うと、見覚えのある巫女服姿が現れた。あれ？しばらく来ないつて言つていたのにな。

「よかったじゃない！ていうかおめでとう！まさかこんなことになるなんてねつ。ちゃんと申し込んでくれるかどうか心配だったのよ！奥廟さんと一緒に家に帰つちやつたときにはもうだめかと思つたわつ。完全にあの子のペースに巻き込まれていたわね。でもよかった。ちゃんと決断できたわね。見直したわつ。これであなたは一歩、いや十歩ぐらい前進できるわよ！」

こつちこそお前には礼を言わなければならぬな、ありがとう。尼寺、お前のおかげで俺は少し変わることができるとも思えない。

「あ、ありがとうだなんて・・うれしいじゃないつ。ふふん、まあ

当然よ私はあなたの中の天使なのよっ」

なんか今の俺以上にうれしそうだな。でも天使は、神道じゃないよな。お前は巫女で、アマテラスだろ。

「ちよっと！私はアマテラスでも巫女でもないって！」

じゃあその服装はなんなんだ。まあ、そんなこんなで俺は夏休みのイベントである保育ボランティアに無事申し込むことができた。おまけに、話し上手な先輩とまで知り合うことができた。俺は今年、有意義に夏休みを過ごすことができるかもしれないな。尼寺、本当に感謝してるぜ。俺は尼寺と、服装のことについて話ながら自転車小屋についた。

「ミクニ！あなた学食で食べるのはやめてベンチで食べるって言ってたわね。私的には学食で食べてほしかったけど、しかたないわね。まあ『便所飯』なんかよりは100倍ましよ。少しずつ人ごみに慣れていけばいいんだから、しばらくはそれでいいわっ。そうだ、ミクニ、どうせだから2人で帰りましょ！私自転車の二人乗りやってみたかったのよ」

ああ、いいぜ。本当はルール上危険だからだめなんだが、どうせ他の人から見ればひとりで乗っているようにしか見えないからな。これって意外と得なんじゃないか？他人に見られることなく、ちよっぴりリア充な気分を味わうことができるなんてな。

「よしっ、じゃあ、しゅっぱーっ！あ、ミクニ今度は転ばないでよね？転んだら痛いんだから！」

1回目転んだときはお前のせいだぞ。まあそんなことはもう忘れてやるさ。

「はいはい、気を付けますよ。じゃあ帰るか。」

俺は今日、2回目の帰宅をしている。同じ山道、同じ下り坂だ。しかし、1回目とは全然見える景色や雰囲気違っていた。俺は、変な服装な女を後ろに乗せて、下り坂を降りていく。夕日がとても、とても眩しかった。

5章

5章

一気にいろんなことが起こり、俺の気分もところ変わつたあの日から、数日がたった。大学の授業は今日で終わった。明日からは夏休みだ。そう、季節はもうすでに夏、リア充たちの季節だ。リア充たちはきつと、キャンプをし、海へ行き、合コンをし、飲み会をし、サークルの合宿にだつて行くだろう。まるで俺とは住んでいる世界が違うみたいだ。今までの俺にとっての夏休みといえば、小学生のころは楽しかったな。宿題や、読書感想文や、ラジオ体操こそ面倒だったが、毎日友達や家族と遊びに行ったりしてたっけ・・・。夏休みにはイギリスにいる父親も帰ってきていたから、父親と一緒に山までカブトムシを取りに行ったこともあったな。結局早起きできなくて取れなかったんだけどな。あのころはよかったな・・・。胸が痛むぜ。中学のころは、部活に入っていて、暑苦しい体育館のなかで、気の合うやつや、気の合わないヤンキー系のやつと一緒にバスケを練習してたっけ。体育館なんて日影があるから外の部活よりは楽だろうって？ いやいや、中も結構きついんだぜ、太陽の暑さではなく、こっちは蒸し暑いのだ。息苦しいぞ。中の部活をしていたやつならわかるだろ？俺は1度も練習をさぼらなかったな。自分で言うのもなんだが、俺は真面目なんだ。しかし、あれだけ練習したのに、結局地区大会の1回戦で負けたっけ。まあ負けたのは残念だったけどさ、俺にとってはいい思い出だったぜ。小、中と俺はそれなりに充実した夏休みを過ごせていた。問題は高校からだ。高校は、またバスケ部に入っただけのいいものの、恐ろしいほどにチャラい先輩たちについていくことができず、1週間でやめてしまった。多分そこらだろうな。俺が『ぼっち』へと進んでいったのは。部活ってもんは、入っているだけで、そいつのステータスになる。大きな大会などがある前には、部活の壮行会というものがあって、部

活に入っている生徒は、それぞれの部活のユニフォームや衣装に着替えて、全校生徒の前で行進し、抱負を言い、何かパフォーマンスをするのだ。大抵のやつは、ユニフォーム姿を見せるのが恥ずかしいだとか言っていたりする。しかし、実際はそうではない。本当は、みんなに見せたいのだ。自分のステータスをな。中学のころにも壮行会はあったから、俺も気持ちだけは分かる。文化部や帰宅部のやつは、その他大勢でそれを見つめるだけだが、運動部にとっては、ファッションショー並の気分なのだ。もし、イケメンや美少女のやつで、ものすごくユニフォームが似合っているとかなったら、もてること間違いなしだ。それだけ、部活というものは、自分をよく見せるためには大切なのだ。しかし俺は、その部活をすぐにやめてしまったのだ。大学生になった今でも、あのころ続けられる部活を選んでいればと後悔している。俺にはステータスの一部、そうだな装備欄がなくなってしまうていた。中学のころは、同じ部活の奴や、隣で部活をしている奴らと交流があり、友達には困っていなかった。女子とも部活関係の話とかをしたりしていたのはいい思い出。俺は高校で部活をしていなかったせいで、気づいたら、そういう交流がなくなっていた。もちろんみんなが部活をしている中、帰宅するのだから、当然帰りは1人だ。テスト週間で部活がない日は、少しだけ仲の良いやつと一緒に変えることもあったが、そんなもの、その1週間が過ぎればすぐに終わってしまう。部活をやっていなかったせいで、俺は学校で影が薄くなっていった。いじめられたりするわけではなくないが、何の特徴もなくなった俺は、薄っぺらい友人関係しか作ることができなかった。だから、夏休みも何をするわけでもなく、家で過ごすことが多かったのだ。だから、俺は高校のころの夏休みには何一つマシな思い出がない。俺は大学生になって2か月たったころ、今年の夏休みも高校のころのように終わってしまうのかと思っていた。しかし、今年は違いかもしれない。尼寺が俺の前に現れてから、俺はその夏休みにも希望を持つことができていた。まだスケジュールは40日近くある夏休みの中で3日しか埋まってい

ないが、上出来だ。高校のころは1つも埋まらなかったからな。俺にも夏休みの予定ができたのだ。3年ぶりだな、うれしいぜ。そんなこんなで、俺は明日から夏休みという学生限定の長期休みの中へ入っていくこととなる。今日寝れば明日から休みだ。ちなみに、そのイベントである保育ボランティアは1週間後だ。何が起ころのかはさっぱり分らんが、待ち遠しい。なにしろ、この前出会った美人の大林先輩に会えるのだからな。リア充だったら、もうすでに飲み会で徹夜しているのかな？俺は電気を消して寝ることにした。電気を消して寝るのは珍しいのだろうか、修学旅行とかではみんな電気をつけて寝たがる。暗闇がこわいのか？よく分からんな。俺は逆に暗くないと寝れないぜ。てなことを考えているうちに俺は眠ってしまった。

俺が、深い眠りにについている時だった。俺には全く意識がない。夢でもみているのだろ。俺が寝ている部屋、この世界とは違う異世界では、俺の知らない中、会話が繰り広げられていた。異世界、それは多分俺の心の中か頭の中かどっかなのだろ。その会話は、姿も性格も全く違う、二人によるものだった。

「尼寺澄子・・・あなたはいったい何のつもりなのかしら・・・ミクニを保育ボランティアなんていう危険なイベントに参加させるなんて・・・」

「何が危険よ。子供と遊ぶの何が危険なわけ？私は、ミクニに、あの醜いどもりや、人見知りを治してほしくて参加を進めたのよ。あれが治らないと、まともに人と会話するのは厳しいわ。」

「治す必要なんてないわ・・・人と話さなければ何の問題もないのよ・・・第一、ミクニは私たちと話しているときはどもってなんかいないわ・・・。会話の相手は私だけで十分なのよ・・・あなたも本当はいらない存在・・・」

「誰とも話さないとか、そんなんじや言葉だつて忘れてしまふ！そんな状態が続けばきつと家族とも話すことがなくなって、最後には絶望するのがおちよ。そんな風になんて絶対なつてはいけなわ

っ！」

すると奥廟は、ニタリと笑いながら答えた。

「絶望・・・？ふふ・・・そうね・・・ミクニには絶望してもらわなきゃいけないのよ・・・そうすればさらに私を頼ってくれる・・・ミクニは私とだけ話してくれる・・・うれしい・・・ミクニは私だけのものになるのよ・・・」

すぐに尼寺は、言い返す。

「ふ、ふざけたことをいわないで！この悪魔め！彼はもつと開けた世界を生きるべきなのよつ。あなたの思うようにいったら、ミクニは大学なんてやめて家にひきこもってしまうわっ！彼には無限の可能性があるのよ。いろんな人と関わりあつて、いろんなことに挑戦してこそ、初めて人間は成長するのよ。成長を止めたらもう人間は終わりなのよ。その成長を阻害しようとするなんて、あなたは悪魔、いやミクニにとりついた悪霊よ！」

奥廟は、悪魔と言われてもなお、落ち着いて勝ち誇った顔をしている。

「そうね・・・わたしは確かに悪霊かもしれないわね・・・人の絶望を取り込んで生きる悪霊・・・。私は自分のため、そしてミクニのために行動しているのよ・・・。急激な変化は絶望を生む可能性がある・・・。だからあなたは、なるべく少しずつミクニを変えようとしている・・・。本当は急激に変化させたいのでしょう・・・？しかしあなたは、私が怖い・・・。急激な生活環境の変化には誰にとつても適用するのは難しい・・・。でも、普通は徐々にそれに適用していくわ・・・。ミクニも人間だものね。でも私はその適用段階に、ミクニが絶望するような出来事を起こすことができる・・・。だからあなたは、細やかに変化させることしかできないのよね・・・。？」

「あなたさえいなければ、ミクニはもつと早く友達ができるのよつ！ミクニの意識は、今、友達を作る方向へとむかっているの。余計な邪魔は私がさせない！」

「嫌われたものね・・・何をしても無駄よ・・・私は、あなたがミクニを誘った保育ボランティアにおいて、ミクニにとってよくないことが起こるようにするつもりなの・・・」

「そんなもの私が回避させて見せるわよ！体育の時はよくもやってくれたわね・・・！私が2人組の授業をさせ、ミクニと鈴木君をかわらせようとしたとき、あなたは、鈴木君が休むように仕向けたのよね？分かってるわよ！それでミクニは絶望してしまったわっ」
奥廟は、ほほを赤らめながら答えた。

「あら・・・やっぱり気づいていたのね・・・あの時1人余ったときのミクニの顔・・・かわいかったなあ・・・あなたこそ、余計なことをすると私に阻まれるというのをそろそろ自覚したほうがいいと思うわよ・・・」

尼寺の表情が強烈な怒りの表情へと変わった。

「この悪霊めええええっ！許さないわっ、私と勝負しなさい！ミクニの意識は私に向いている！きっと私が勝つわ！」

尼寺は、どこかに隠し持っていた鋭い剣を取り出した。形は、伝説の武器である、天叢雲剣あめのむすくものしるぎに似ている。

「あら・・・？あなた私に勝つつもり・・・？無理よ・・・あなたごときじゃ私には絶対に勝てない・・・。ミクニの心に変化へのためらいがある限り、絶対にね・・・。それでも戦うつもり・・・？それなら容赦しないわよ・・・邪魔なあなたには消えてもらわなきゃいけないのよ・・・。ミクニには、さらに『ぼっち』を極めてもらうわ・・・。」

そう言うと、奥廟は闇に包まれたオーラを放ち出した。手のひらには黒い塊が稲光を放ちながら光り輝いている。

「くっ・・・そんな・・・まだこんなに強い力を持っているだなんてっ！」

「ふふふ・・・あら・・・残念、もう夜は明けそうね・・・そろそろミクニが目を覚ますわ・・・今決着をつけようと思っていたのにラッキーね尼寺さん・・・。この勝負はまた今度、この世界であっ

たときにしましょう・・・」

そう言うと、奥廟は跡形もなく姿を消した。いったいどこへ消えるのだろう。

「はあ・・・まだ、まだ駄目なのね・・・まだミクニの意識が足りていないのね・・・保育ボランティア、絶対成功させないと・・・。うまく立ち回らないと。がんばれっ私っ！」

そういうと尼寺もどこかへ消えて行った。2人が俺の妄想だとして、いったいどこへ行くのだろうか。そんなことは、全く知らず、さらに今まで起きていた口論なんて全く知らないマヌケな俺は、朝、いつもよりも早く目が覚めていた。休みの日に限って早く起きてしまうものなんだな。

「あゝせっかく早く起きたんだ、久しぶりに飯でも作るか」

俺は妹よりも早く起きたらしい。母親よりは遅いけどな。母はもう仕事に行ってしまった。大変だな・・・。サービスだ、妹の分も料理作ってやる。妹は俺に料理を作ってくれないが、俺は違う。かわいい妹のためになら、ちょっとばかり手間が増えても構わないさ。俺は適当に目玉焼きを焼き終わった。すると、妹が起きてきた。「んおっ！くにたか起きんの早っ！なんなの？ぐうたらがこんなに早く起きて。雨ふっちゃうよ・・・」

「はっは、俺も時には、やるもんさ。そんなことより飯作つといたぞ。ほら、これなら誰でも簡単に・・・」

眠そうな顔で、目玉焼きをほおばった、妹はすぐに反応した。

「うえつまずっ！くにたかの料理まずっ！」

おい・・・。目玉焼きは誰が作っても同じだろ・・・まあ一流シェフはいろいろ焼き加減とか考えているから違うかもしれないが、こんな一般の家でなんて、誰が作っても味なんて変わらんぞ。妹よ！それはひどい。と思ったが、案外ガツガツちゃんと食ってくれている。なんだよ、素直じゃないな。俺は、いろいろ文句を言いながらもちゃんと食べてくれている妹を見つめ安堵していた。夏休みだが、予定がない日は、いつもと大して変わらないな。ただ、妹が学校へ行

く前に聞く、友達との待ち合わせという言葉を聞かないぐらいだな。あれは結構くるぜ……。俺は、いつも通り普通に日常の休みの朝を過ごしていた。夜に俺の知らないところで、大変なことが起こっていたということなんて知る由もない。さて今日はどうしようかな・。そんなことを思いながら、俺は残りの目玉焼きをかじった。大切なのは、1週間後の保育ボランティアだ。絶対いい思い出しにしているぞ。しかし俺はこの後の数日間、様々なことをする羽目になるのだ。白紙だった俺のスケジュール帳にいろいろと書き込むときが来たようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5050ba/>

Bocchi !

2012年1月15日04時48分発行